

校正

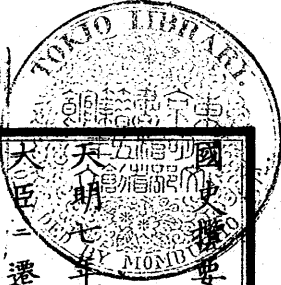
國史學要

卷十四

| |
|-----|
| 178 |
| 7 |
| 196 |
| 館藏 |
| 一 |
| 六册 |
| 二號 |
| 三架 |
| 八函 |

二本

| |
|--------|
| K110,2 |
| 3,1 |
| 14 |



國史綱要卷之十四

笠間

明治九年圖書局交付
棚谷元審 編輯

天明七年、權大納言源家齊ヲ以テ、征夷大將軍ト為シ、内
 大臣ニ遷ス。○時ニ天下大ニ飢エ、米一斗、五六升、價ヒ金
 一圓、抵ル、大坂飢民群起メ、米商富豪ノ家ヲ毀ツ、伏見
 界播州等ノ民、亦聚テ乱ヲ作ス、關東ノ諸國亦蜂起シ、江
 戸ノ市民數百人、街陌ニ横行シ、米商巨賈ノ宅ヲ壞リ、米
 金ヲ散乱シ、帳簿ヲ蹂躪ス、府下騷然、幕府即チ吏ニ命メ
 追捕シ、米六萬苞、金二万兩ヲ突メ、飢民ヲ賑シ、又吏ヲ諸
 州ニ遣テ、蓄積ヲ募テ之ヲ賑恤ス。○六月、越中守松平定

信ヲ以テ老中ト為ス、定信ハ田安宗武ノ第三子、出テ、
白川矣、定邦ノ嗣ト為ル、學古今ニ通シ、夙ニ賢明ヲ以テ
著ハル、於是三家相議メ、老中ノ首座ト為シ、將軍ヲ輔翼
人、大政ヲ委任ス、定信乃チ銳意ニ前代ノ弊事ヲ革メ、一
ニ有徳ノ政ニ復ス、其始テ政廳ニ入ルヤ、幹濯ノ締絡ヲ
服シ、食唯一菜、諸老中大ニ愧テ、皆衣食ヲ菲フシ、諸吏相
率テ節儉ニ向フ、乃チ令ヲ下メ奢侈ヲ禁シ、風俗ヲ正シ、
文武ヲ振起シ、人材ヲ薦達ス、一号令出ルコトニ、士民悦
服シ、従前ノ弊政、渙然トメ觀テ改ム、時人謂ラク聖帝西
ニ在リ、賢宰東ニ出ツ、淳厚ノ俗待ツ可シト、○九月、幕府

麾下ノ士、學ニ志ス者ヲ召メ、書ヲ管中ニ講セシメ、老中
列坐メ之ヲ檢シ、尋テ聖堂日講ノ課ヲ設ケテ、其講師ト
ナシ、士民ニ令メ之ヲ聽カシム、又柴野茂輔ヲ召メ侍講
ト為ス、茂輔名ハ邦茂、栗山ト号ス、讚岐高松ノ人、學術淳
正ニメ、詩文及ヒ書ヲ善クス、○八年正月晦日、京師災アリ、
禁闕及ヒ公卿ノ邸宅、街衢佛宇、延燒略々、尽ク、幕府金
數萬ヲ以テ緡紳ニ分テ給シ、又米及ヒ銀ヲ都民ニ廩貸
ス、根岸肥前守鎮衛西上メ之ヲ掌ル、○三月、幕府皇宮ヲ
造ル、諸侯ニ課メ役ヲ助ケシメ、松平定信其事ヲ管ス、○
十一月、將軍家齊、吹上廳ニ於テ諸奉行ノ斷訟ヲ聽ク、○

光緒二十一年

寛政元年八月、天皇敕メ行宮ニ釋奠ス、菅原為顯、年甫テ
十四、孝經ヲ進講ス、天皇嘆賞メ曰、秀才ノ名虚シカラス、
○九月、幕府天下諸藩ニ令メ、穀ヲ貯テ凶荒ニ備ヘシム、
萬石コトニ粟五十石ヲ出ス、○十二月、幕府天下ニ令メ、
異學ヲ禁ス、物茂卿等古學ヲ倡ヘシヨリ、程朱ヲ排撃
スル者相踵テ出テ、躬禰ヲ務メス、放言誇張、風教ニ害
アルヲ以テ是命アリ、○二年正月、幕府天下ニ令シ
テ、婦女ノ衣服笄簪、高價ノ品ヲ用ルルヲ禁ス、○三月、
天皇諸廷臣ニ詔メ、常ニ節儉ヲ行ヒ、大禮節會拜賀ノ
朝衣モ亦其故ヲ用井、諸進献モ舊額ヲ減セシム、幕府

亦申令メ、居宅ヲ美ニシ、飲宴ヲ設ケ、贈遺ヲ厚フスル
ヲ禁シ、麾下ノ士ハ節儉ヲ專ラニシ、文武ヲ講究シ、
風俗ヲ敦厚ニスルヲ令シ、老中備後守牧野貞長、本
多彈正少弼忠籌等相與ニ定信ニ協和メ、貪暴ヲ黜ケ、
廉直ヲ舉ケ、贈遺一モ受ル所ナシ、天下靡然トメ化ニ
向ス、○五月、幕府柴野邦彦、岡田恕ニ命メ、聖堂ノ事ヲ
掌ラシム、恕清助ト稱シ、寒泉ト号ス、篤學ノ士、尋テ又
古賀樸、尾藤肇ヲ召メ侍講トナス、樸彌助ト稱シ、字ハ
淳風、精里ト号ス、肥前佐賀ノ藩士、肇良助ト稱シ、字ハ
志尹、二洲ト号ス、皆博學篤行、君子ノ儒ナリ、栗山ト同ク、

三先生ト稱シ一代ノ泰斗タリ。○九月、皇宮及ヒ上皇ノ宮成ル、諸門殿廊皆上古ノ制ニ復ス、天皇大ニ悦ヒ、詩ヲ製メ、將軍ニ賜ヒ、上皇亦歌ヲ咏メ、賜フ、詩ニ曰、遙慕周文圃、不羨漢武臺、舊章一是從、新築本非催、百工忽告竣、整駕自東回、拭目向城雉、城雉亦美哉、兩殿應規矩、四門總崔嵬、燕雀競蒼集、櫻橘接階栽、豈其為逸豫、講禮共徘徊、委佩群僚會、將幣九州來、素心既已足、起卧感塩梅、欣然歌思動、乙夜薄言裁、歌ニ曰、殿造リ、ミカキ立チタル嬉シサハ、心ヲ見スル、大和コトノ葉。○十月、幕府醫學館ヲ置キ、醫官多紀安長ニ命メ之ヲ掌ラシム、初メ、明和二年、醫官多紀安元

請テ之ヲ佐久間町ニ建ツ、是ニ至テ制ヲ改メ、幕府ノ所管トナル、後ナ災ニ遇テ新橋ニ移ス、○四年二月、幕府大番頭以下ノ士ニ命メ、予馬刀槍ノ技ヲ演セシメ、家齊臨テ之ヲ閱ス、老中參政以下皆從テ、各金帛ヲ賞ス、○此年閏二月ヨリ四月ニ至テ、肥前温泉嶽火ヲ發シ、灰石ヲ兩ラス、嶋原地熱メ人歩シ難シ、已ニメ熱水ヲ噴出シ、海亦溢ヒ、嶋原天草死スル者三万人、肥後死スル者二万人、○五月、大坂災アリ、懷德堂延焼ス、享保中、中井誠之、幕命ヲ以テ建ル所ナリ、於是、教授中井積善ニ金ヲ賜ヒ之ヲ修メシム、積善竹山ト号シ、草茅危言逸史等ヲ著ハス、弟積

德履軒ト号シ、通語ヲ著ハス、皆學術文章ヲ以テ稱セラ
ル、○九月、幕府始テ科試ヲ聖堂ニ設ク、四書小學ヲ一科
トナシ、五經歴史并ニ論策各科アリ、本日經書ハ某章ヲ
掲ク、策論亦同シ、試ニ應スル者、各其解ヲ書シ、其論ヲ書
メ、之ヲ主司ニ呈ス、他日、諸儒ヲメ其甲乙ヲ評定セシメ
上中下三等ヲ分チ、銀及ヒ時服ヲ與テ之ヲ賞ス、四歳コ
トニ一試ス、○是月、家齊次上廳ニ於テ、諸士ノ武技ヲ觀
ル、各賞賜アリ、○五年二月、前大納言中山愛親、前大納言
正親町公明、幕府ノ召ヲ以テ江戸ニ至ル、初メ帝所生太
宰帥典仁親王ヲ尊テ、太上天皇ト為ント欲シ、旨ヲ幕府

ニ傳フ、幕議以為ラク、主上統ヲ継キ、固ヨリ父子ノ義ク
リ、別ニ生父ニ尊号ヲ奉ルノ理アラレヤト、遂ニ二卿ヲ
召テ之ヲ問フ、三月七日、二卿營ニ登ル、既ニ退テ一ハ門
ヲ閉チ、一ハ出行ヲ禁ス、十日、江戸ヲ祭メ京ニ歸ル、或ハ
曰、此日、中山大納言、營中ニメ辯論激昂、諸老中、辭屈メ對
ルヲ能ハス、水戸中納言、松平定信、僅カニ之ヲ彌縫ス、然
正事聖慮ノ如クナルヲ能ハス、二卿因テ咎ヲ引テ門ヲ
閉ツト、○是歲、高山茂九郎正之卒ス、正之ハ上野ノ人ナ
リ、慷慨ニメ奇節アリ、常ニ尊攘ヲ以テ志ト為リ、尤モ皇
室ノ凌夷ヲ嘆ス、初メ京ニ在リ、中山大納言愛親、其人ト

為リテ奇トメ善ク之ヲ遇シ、諸縉紳ノ家ニ出入ス、嘗テ京郊ヲ過キ、足利尊氏ノ墓ヲ問ヒ、其大逆ノ罪ヲ數テ其碑ヲ鞭ソテ三百、平安ニ入ル毎ニ三條橋上ニ至テ、遙ニ皇闕ヲ望テ地上ニ拝跪メ曰、草莽ノ臣、高山茂九郎ト、途人群笑スレモ顧ミス、天明年間田沼氏、政ヲ天下ニ為シ、風俗大ニ壞レ、中外愁怨ス、正之滯ヲ拭、テ同志ニ謂テ曰、公上知ル所ナシ、今紙旆ヲ山廟ノ門外ニ樹テ、有志ヲ招ク、立トコロニ千人ヲ得ヘシ、豎子ヲ梟スルニ於テ何シカ有ラン、聞ク者耳ヲ掩フ、正之遂ニ劔ニ仗テ四方ニ周游シ、豪俊奇傑ノ士ニ交ル、足跡天下ニ徧シ、談南朝ノ事

ニ及フハ、慷慨淋漓、声淚共ニ墮ツ、至ル所人心ヲ激勵シ、義氣ヲ鼓動ス、皆其至誠ヨリ出ツ、而メ未タ嘗テ一日モ皇室ヲ忘レス、己ニメ白川侯代テ大政ヲ執リ、弊事悉ク革ル、正之喜ヒ顔色ニ動ク、後チ鄂羅邊海ヲ窺フト聞テ意ヲ決メ北游シ、遂ニ海ニ航メ中國ニ達シ、京ニ留ルテ數月、復々西海ニ游ヒ、居ルテ三年、復々京師ニ歸ル、居常快々トメ樂マス、是歲筑後ノ久留米ニ至リ、森嘉勝カ家ヲ主トス、一日憤氣滿面、其日、東ヲ出メ之ヲ寸裂シ、遂ニ刀ヲ拔テ腹ヲ屠ス、嘉勝驚テ故ヲ問フ、正之曰、吾レ國家ニ報ヒント欲シ、自ラ以テ忠ト為シ、義ト為ス所ノ者、

今反テ不忠不義ノ事トナレリ、是レ天吾ヲ殺スナリ、嘉
勝治ヲ加ヘント請フ、正之聴カス、嘉勝曰、然ラハ則テ官
ニ告テ驗視セン、否ラサレハ吾法ニ違フノ罪アリ、子且
ツ殊スルヲ勿レ、正之曰、諾、談笑平生ノ如ク、京師ノ方ヲ
問シ手ヲ拍テ再拜ス、吏来テ之ヲ檢シ、且故ヲ問フ、正之
曰、狂發スルノミト、復タ答ヘス、曉ニ及テ遂ニ死ス、死ニ
臨テ曰、我カ為ニ天下ノ豪傑ニ謝セヨ、次留米侯之ヲ憐
ミ存下ノ通照院ニ葬リ、之ヲ其郷里ニ告ク、正之既ニ死
レ世其故ヲ知ル者ナレ、後テ数月其墓前ニ自尽スル者
アリ、容貌魁偉蓋レ唐崎常陸介ナリ、唐崎モ亦慷慨ノ士

ナリ、正之初メ其名ヲ聞テ、未タ其面ヲ識ラス、一日聖護
院法親王ニ詣ル、一士人ノ状良非常ナルヲ見ル、正之之ヲ
視テ曰、君ハ高山殿ニ非スヤ、正之曰、君ハ唐崎殿カ、因テ
手ヲ執テ泣テ曰、天下ノ事、何ソ此ニ至ルヤト、終ニ交ヲ
定ム、是ニ至テ唐崎モ亦タ感スル所アルナリ、同時ニ蒲
生秀實アリ、君平ト称シ、正之ト志趣ヲ同フス、天明季年、
正之カ北游ヲ開キ、追テ陸奥ノ石巻ニ至ル、及ハスメ遂
ニ返ル、終身ノ憾トナス、秀實ハ蒲生氏郷ノ裔ナリ、慷慨
ニメ大節アリ、常ニ祖先ノ声名ヲ興サント欲シ、憤發書
ヲ讀ミ章句ヲ治メス、尤モ心ヲ古ノ制度律令ニ留メ、當

世ノ癸ニ簡練ス、游ヲ好テ足跡天下ニ半ナリ、京師ニ在
テ小澤芦庵ト善シ、東ニ歸ントス、芦庵離宴ヲ其宅ニ設
ケ、待テ氏至ラス、日暮ニメ至テ曰、途ニメ東寺ニ過リ、足
利尊氏ノ像ヲ見テ憤怒ニ堪ヘス、之ヲ鞭ツテ數百、故ニ
後ルト、其江戸ニ在テ撰述ヲ事トスルヤ、家甚ク貧シ、夜
ル笛ヲ吹テ按摩ヲ鬻クニ至ル、相識ノ僧アリ常テ之ヲ
訪ス、柱ニ倚テ憂色アリ、僧之ヲ問ス、秀實曰、終日食セサ
ル故ノミ、僧走テ米ヲ買ヒ、來リ、炉上之ヲ炊キ、相對メ外
虜ノ事ヲ論ス、秀實鍋蓋ノ上ニ就テ、形勢ヲ指畫シ、議論
勃々トノ已マス、飯ノ既ニ俵ル、ヲ知ラス、其貧ヲ以テ

心ヲ屈セサルコト此ノ如シ、文化丁卯ノ歲、北辺警アリ、秀
實策五篇ヲ作り、不恤緯ト名ツク、之ヲ執政ニ獻ス、報セ
ラレズ、又常憲有徳ノ後、山陵ヲ修メサルヲ慨シ、自ラ其
地ヲ跋涉メ、古圖舊記ヲ以テ考校シ、山陵志ヲ作テ、之ヲ
京師及ヒ幕府ニ上ル、有司以為ラク皆布衣ノ議スヘキ
所ニ非スト、召メ之ヲ詰問ス、秀實乃チ律文ヲ引キ、故事
ヲ誦メ以テ答フ、論辭激烈、有司其不遜ヲ惡ンテ、之ヲ重
法ニ處セントス、祭酒林大學頭、素ヨリ其人ト為リヲ知
ル、因テ謂テ曰、草茅ニ危言ノ士アルハ、國家ノ福ナリ、終
ニ置テ問ハス、秀實常ニ曰、王室ヲ尊テ以テ名分ヲ明カ

ニシ、諸侯ヲ富マメ以テ邦基ヲ固フシ、祀典ヲ明ラカニ
メ以テ禮敬ヲ教ヘ、左道ヲ禁メ以テ亂源ヲ塞キ、武事ヲ
鍊メ以テ寇賊ニ備フ、斯レ吾志ナリ、今書ヲ著ハメ當世
ノ得失ヲ規ス、又職官志ヲ撰ミ、次テ神祇姓族等ノ志ヲ
撰テ九志ト為ント欲ス、未タ成ラヌメ没ス、年四十六、仙
臺ノ林子平亦タ時ヲ同フス、子平倜儻ニメ大志アリ、常
ニ士人ノ宴安ニ慣レ、煖飽自ラ居ルヲ見テ謂ラク、爰有
ル、其用ニ堪ヘスト、於是敝衣糲食、寒暑ヲ避ケス、四
方ニ歷游シ、常ニ高履ヲ跣テ、數百里ヲ跋渉スルヲ、隣里
ニ往來スルカ如シ、諸國ノ風土民俗、政刑ノ得失、皆諳知

セサルヲ無ク、尤モ海防ニ注意ス、於是再ヒ長崎ニ游ヒ、
外國ノ人ニ接メ、海外ノ情狀ヲ問ヒ、歸テ海國兵談ヲ著
ハス、其意ニ謂ラク、日本橋ヨリ歐羅ノ諸國ニ至ルマテ、
水路相通ス、彼レ大洋ヲ見ルヲ、平地ノ如クニメ、我レ手
ヲ拱メ備ヘ無キハ危シト謂ツ可レ、必ス瀕海衝要ノ地
ニ、砲臺ヲ築キ兵備ヲ設ケ、日本ヲ以テ一大城ト為メ、逸
ヲ以テ勞ヲ待ツ、庶クハ患ヲ免ル可シト、又謂ラク我カ
南北ノ諸島、委テ、顧ミス彼レ先ツ之ニ據ルキハ、異日
ノ大患ナリト、三國通覽ヲ著ハス、二書既ニ梓ニ上ル、時
人謂ラク是レ其事ヲ誇張メ、名ヲ要ムルナリト、幕府亦

史記卷一百一十四
卷一百一十四
タ以為ラク、人心ヲ動カスト、命メ其梓ヲ毀テ、仙臺ニ禁
錮ス、時ニ寛政四年五月ナリ、子平乃チ六無ノ歌ヲ作テ、
曰親モナシ、妻モ子モナシ、板木ナシ、金モナケレト、死ス
クモナシ、自エ六無齋主人ト号ス、先是太宰帥親王ニ、尊
号ヲ奉ルノ議未タ決セス、物議騷然タリ、子平常テ執政
白川侯ニ見ミユ、侯ノ談此事ニ及フ、子平笑テ曰、天朝ノ
幕府ニ於ル、是レ君臣ノ際ニメ一家ノ事ナリ、憂アルモ
家ヲ失フニ至ラス、異邦ノ事ニ至テハ、外来ノ大盜ノ如
シ、或ハ家ヲ併セテ奪ヒ去ルニ至ルト、其邊防ヲ憂フル
此ノ如シ、初メ子平京師ニ在テ、中山大納言ニ謁ス、公盛

シニ高山正之カ慷慨流涕ノ状ヲ稱ス、子平曰、彼レ泣癡
アリ、方今昇平ノ世、何ソ泣フ用レ、唯憂フ可キ者ハ外寇
ナリト、蒲生秀實モ亦嘗テ子平ヲ訪フ、行装甚タ野ナリ、
子平一見メ嘲テ曰、窮措大イ、大何ソ野鄙ナル、秀實怒テ曰、田
舎翁何ソ無状ナル、即時ニ別レ去ル、子平既ニ歿メ、後チ
十餘年、東陸果メ鄂羅ノ憂アリ、秀實其先見ニ服シ、書ヲ
執政ニ上ツテ曰、今日宜ク子平ノ墓ヲ祭テ、其靈魂ニ謝
ス可キナリ、後チ幕議邊防ヲ修ルニ及テ、其言ヲ取ル
有リト云、○五年七月、幕府和學講談所ヲ番町ニ置ク、塙
檢校ノ請フ所ナリ、乃チ檢校ニ命メ之ヲ司ラシム、檢校

名ハ保已一武藏保已村ノ人ナリ、幼ニメ明ヲ失ヒ、萩原
宗固ニ從テ學ヒ終ニ大成シ、強記博聞、當世匹ナレ、著ハ
ス所ノ群書類聚、六百六十餘卷、後世其賜ヲ受ルヲ多シ、
其他椒庭譜略、皇親譜略、螢蠅抄、花咲松等ノ書ヲ著ハス、
片山足水ナル者、嘗テ宸翰一紙ヲ秘藏ス、末ニ太上天皇
ノ御署アルノミ、何レノ天皇タルヲ知ルヲ能ハス、諸博
識ノ人ニ貸スニ、辨スル者ナシ、一日國學ノ諸名士、屋代
輪池ノ宅ニ會シ、檢校亦座ニアリ、談宸翰ノ事ニ及フ、檢
校乃テ其御文ヲ讀マシメテ之ヲ聽キ、延禁之闕、宸居無
動、姑射之山、萬壽不騫ノ句ニ至テ、手ヲ拍テ曰、了セリ、是

花園天皇ノ宸翰ナリ、天皇ノ位ヲ禪ル、伏見帝猶仙洞ニ
在リ、故ニ姑射ト稱シ、當時ノ主上ヲ後醍醐天皇延禁ト稱ス
ルナリト、一坐皆嘆服ス、其強記此類ナリ、○九月、魯西亞
ノ使者阿陀牟海ニ航メ蝦夷ノ根室ニ來テ、我カ漂民磯
吉幸太夫ノ二人ヲ送リ歸シ、且互市ヲ乞フ、幕府許サス
乃テ目付石川左近將監村上大學ヲ松前ニ遣テ之ヲ喻
ス、○十二年八月、先是松平定信教ヲ奉メ、諸國ノ孝子義
僕良民ノ狀ヲ徵シ、林信徹、柴野邦彦、尾藤志尹等ニ命メ
之ヲ撰次セシメ、孝義錄ト名ツク、是ニ至テ成ル、凡ソ五
十卷、○九月、幕府廣島ノ儒員頼維、完、鹿見島ノ儒員赤崎

貞幹ヲ辟メ、經ヲ聖堂ニ講セシム、維完、春水ト号シ、貞幹
海門ト号ス、皆當時ノ儒宗タリ、維完ノ二弟、維強、春風ト
号シ、維柔、杏坪ト号シ、皆儒雅ヲ以テ著ハル、○享和元年
六月、出羽ノ民大ニ蜂起ス、初メ米澤侯、彈正、大弼上杉治
憲、賢明ニメ學ヲ好ミ、細井平洲、瀧鶴臺、澁井太室、南宮大
湫等ヲ招テ之ニ師事シ、尤モ平洲ヲ重シシ、延テ國政ヲ
議シ、舊弊ヲ除キ、新政ヲ施ス、封内大ニ治リ、民皆悦服ス、
高畑鐵田左近、山形秋元但、上ノ山松平山ノ、諸民之ヲ養
望スル、一年アリ、是ニ至テ黨ヲ結テ群起シ、其國侯ノ政
治モ、米澤ニ劾ハン、一ヲ嗽訴ス、平洲尾張ノ大碩學、德行

世ニ盛名アリ、尤モ經濟ニ長ス、同時、熊本侯、肥後守、細川
重賢モ、亦タ仁恕ニメ學ヲ好ミ、才文武ヲ兼ネ、殊ニ射ヲ
善ス、堀平太ヲ側陋ニ舉テ、委ヌルニ國政ヲ以テシ、大ニ
學校ヲ興メ、文武ヲ合シ、秋山、玉山、藪孤山ニ命メ、學ヲ督
シ、且國政ニ參與セシメ、吏民化ニ向ヒ、政治ノ美、隣國ノ
模範トナル、重賢、江戸ニ在ルルハ、列侯皆細川先生ト稱
メ、名イハス、肥後侯、靈感ト稱シ、米澤侯、鷹山ト稱ス、當時
國君ノ賢明ヲ舉クレハ、必ス先リ靈感、鷹山ノ二公ヲ稱
ス、平洲野并并ヲ著ハメ、米澤ノ治ヲ述ヘ、龜井道載、肥後侯
語ヲ作テ、熊本ノ政ヲ贊揚ス、○是歲、平宜長波、長波ス、宜長承

○先格
三

居氏鈴居ト号ス、初メ醫ヲ業トシ、後チ賀茂真淵ニ從テ、
本朝ノ古學ヲ精究シ、中興ノ祖タリ、其著ハス所ノ古事
紀傳、後生ヲ裨益シ、國體ニ功アル甚タ本ナリ、其他ノ著
書頗ル多ク、公卿士民、ミナ推服ス、没ス年七十二、後チ平
田篤胤アリ、伊吹屋ト号シ、其墓ニ詣リ、誓テ弟子トナリ、
大ニ其學ヲ闡宏ス、篤胤尤モ博洽、窺ハサル所ナク、其志
ミナ我カ神聖ノ大道ヲ明ニスルニアリ、著書甚タ多シ、
真淵宜長篤胤ヲ二人ト稱ス、○文化元年九月、魯西亞
ノ使節、吟哨涅吐長崎ニ來リ、我カ漂民、四人ヲ送り返シ、
書及ヒ方物ヲ出メ、通商センコトヲ乞フ、奉行肥田豊後守

頼常之ヲ江戸ニ報シ、國法ヲ擧テ之ヲ論メ歸リ去ラン
ム、吟哨涅吐敏ニメ機辨アリ、初メ船中ニ在テ疾ヲ得タ
リ、因テ上陸メ之ヲ療シ、且船ノ破壊ヲ修理センコトヲ請
フ、時ニ國法洋人ノ上陸ヲ禁ス、衆吏法ヲ守テ聽カス、頼
常曰、疾有テ療スルヲ許サス、船壞レテ繕フヲ許サス、是
信義ヲ海外ニ失フナリ、法ヲ犯スノ罪吾獨リ之ヲ受ン
ト、遂ニ其請ニ從テ、使節感謝メ去ル、頼常狀ヲ幕府ニ上
テ罪ヲ請フ、執政牧野備前守忠精曰、遠境ノ奉行宜ク此
ノ如クナルヘシト反テ之ヲ賞ス、○三年三月四日、江戸
大ニ災ニ市街ノ屋舎延焼スル者百二十七萬餘、疾伯ノ

邸神祠佛宇、二千餘區燒_レ亡_シ、死者千二百餘人、幕府米銀
ヲ散_メ大ニ之ヲ賑恤ス、○九月、魯西亞ノ戰艦蝦夷ニ來
テ、留_ル宇多珂ノ柵ヲ焚キ、戍卒四人ヲ捕ヘ去ル、○四年三
月、松前若狹守章廣罪アリ其封ヲ收ム、因テ南部津輕ノ
二藩ニ命_メ箱館及ヒ蝦夷ノ地ヲ守衛セシム、四月、魯西
亞ノ賊船復々擇_テ祝_ニ冠_シ、名蘭總ヲ焚キ、戍卒三人ヲ捕
ヘ又_レ舍那ノ柵ヲ焚キ、器械ヲ奪テ去ル、五月、復々理伊志
理島ヲ掠メ、捕_ル野ノ卒四人ヲ返シ、書ヲ付_メ通商五
市ヲ請_フ、曰、聽カスンハ、大舉メ東西蝦夷ヲ攻ント、幕府
會津仙臺ノ諸藩ニ命_メ、蝦夷ノ要害ヲ守ラシム、初メ吟

咆_レ涅吐ノ長崎ヨリ返ルヤ、堪_カ察_カニ至リ其土ノ無頼ヲ
誘_テ曰、汝等往テ蝦夷ノ地ヲ乱ス可シ、日本必ス奪命ニ
勞_メ五市ヲ許サント、於是賊船數々來テ焚掠ス、當時我
カ國未タ其情ヲ知ラス、大ニ幕議ヲ勞シ、守備ヲ嚴ニス、
明年八月之ヲ罷ム、○五年八月、諸厄利ノ賊船長崎ニ來
リ、即夜ニ小船ヲ以テ港ニ入り、民家ヲ抄掠ス、奉行松平
圖書頭、檄ヲ黒田鍋島ノ二藩ニ飛シ之ヲ燒夷セント欲
ス、兵未タ至ラス、賊船夜ニ來メ帆ヲ揚テ去ル、於是圖書頭
自_レ處置機ヲ失_フノ罪五條ヲ書メ、之ヲ幕府ニ上聞シ、
遂ニ自殺ス、○十二月、幕府南部津輕ノ両藩ニ命_メ、東西

ノ暇夷ヲ總督セシム。○七年十一月、水戸參議源治紀、上表メ大日本史ヲ獻ス、綱條以來此書ヲ校補シ、此ニ至テ稍ク成ル、因テ之ヲ鑲牘セシメテ請フ、詔メ之ヲ許ス。○八年三月、朝鮮ノ使者、金履喬等對馬ニ來リ、方物及テ書ヲ幕府ニ呈メ、將軍ノ繼職ヲ賀ス、先是幕府命ヲ宗對馬守ニ傳ヘテ韓使ノ江戸ニ來ルヲ罷メ、對馬ニ接見セシム、於是韓使對馬ニ止ル、幕府乃チ大膳大夫、小笠原忠國、中務大輔脇坂安董ニ命シ、往テ之ニ接セシム、儒員林大學頭銜古賀彌助、副トナリ、松崎懷堂書記タリ、禮畢テ客館ニ筆語ス、韓使等大ニ精里懷堂ノ學術文章ニ服シ、

又岡本豊洲ノ詩ヲ賞ス、○九年四月、少將松平定信致仕ス、先是輔佐及ヒ執政ヲ、辭メ、溜詰ト為ル、是ニ至テ致仕ノ樂翁ト号ス、定信賢德既ニ上下ニ著ハレ、舉世倚頼ス、其致仕ヲ聞テ入皆之ヲ惜ム、國本論、求言錄、集古十種、花月冊子等ノ書ヲ著ハス、○是歲、江戸ノ儒者山本信有没ス、信有北山ト号シ、博學ヲ以テ稱セラレ、太田錦城、朝川翁庵等其門ニ出テ、一家ヲ成ス、同時龜田興鵬、齊ト号シ、詩文及ヒ書ヲ善シ、豪才ヲ以テ著ハル、共ニ著書多シ、○十年、先是文化八年、魯西亞ノ船將伊理巨留戰艦ヲ以テ理井岸ニ至リ、八人陸ニ上ル、南部成兵之ヲ捕フ、次年

八月後々来リ我漂民三人ヲ還シ其八人ヲ還サンコトヲ
請フ、戌兵肯ンセス、是ニ至テ復々松前ノ豪商高田屋金
兵衛ヲ海上ニ要シ、勢へ来テ言ハシメテ曰、往歲柄太等
ヲ抄掠フル者ハ、皆堪察加ノ徒ノ為ス所ニメ、吾王ノ知
ル所ニ非ス、我國已ニ彼等ヲ罪メ、貴國ニ入ラシメ、因
テ去年臣等来リ謝ス、然ルニ貴國我カ輩ヲ待スル過嚴
ナリ、請フ他無キヲ察メ、八人ノ俘ヲ賜ヘト、松前奉行報
メ曰、入犯ノ謝書ヲ致シ、嚮ニ掠ル所ノ器械ヲ還サハ、八
人ヲ與ヘント、伊理古留大ニ悦テ、器械及ヒ謝書ヲ致ス、
乃チ俘ヲ還シ答書ヲ與テ、北邊ノ警始テ止ム、○十三年

十一月、摂州能勢郡野間ノ莊、出野村ニ八幡ノ小祠アリ、相傳
フ壇浦ノ役ニ左少辨經房等、安徳帝ヲ奉メ別船ニ御シ、
源氏ノ圍ミヲ出テ、山陰ニ入り、東ニ走テ此ニ駐リ、京
師ニ入ントス、後鳥羽帝既ニ立ツヲ聞テ止ム、明年帝疾ヲ
崩ス、經房乃チ廟ヲ建テ、奉祀シ、八幡宮ト稱ス、村民下
辻氏ハ、即チ經房ノ裔ナリト、是月下辻氏屋宇ヲ修理シ、
棟上ノ竹筒中ニ於テ、經房カ遺書ヲ得タリ、填スルニ輕
粉ヲ以テス、其帝ノ事ヲ記載スル土人ノ言フ所ト悉ク
相符ス、未ニ經房以来ノ系ヲ記シ、天正中ニ至テ止ム、蓋
シ竹筒ヲ棟ニ納レテヨリ、之ヲ記セサルナリ、能勢氏之

ヲ松平樂翁ニ呈ス、樂翁之ヲ奇トシ、人ヲメ鑒セシムル
ニ、皆曰六百年前ノ古紙ナリト、樂翁大ニ感賞シ、自ラ其
外函ニ題署メ、永ク之ヲ寶藏セシム、按スルニ壇浦ノ役
ニ、源氏ノ兵、平太后ヲ救ヒ宗盛父子ヲ搭メ獲タリ、豈ニ
天皇ヲ奉救スルノ暇ナカラシヤ、而メ其事ナキ者ハ、天
皇此ニ在ラサルヲ以テナリ、問曰耕筆ニ曰、緒方三郎維
義ハ、平氏ノ純臣ナリ、平軍ノ終ニ勝ツ可ラサルヲ料テ、
陽ハニ源氏ニ降り、陰カニ天皇及ヒ諸臣ヲメ肥後ノ五
箇村ニ遁レシム、戰破ル、ニ及テ海ニ投スル者、多クハ
其形ヲ偽ハル者ナリ、伊達恭衡カ頼朝ノ言ニ從テ、夜川

ノ館ヲ襲ヒ潛カニ義經ヲ蝦夷ニ脱スルト同一策ナリ
ト、彼是ヲ參考スルハ、安徳天皇ノ壇浦ニ崩セサルヤ
昭然タリ、我カ國體ノ正シキ神裔ノ尊キ、彼ノ崖山魚腹
ト、日ヲ同フメ語ル可ラス、○十四年三月、天皇位ヲ皇太
子ニ禪ル、天保十一年、十一月十九日崩ス、壽七十、天皇聰
明ニメ學ヲ好ミ、典故ヲ精究ス、宮殿ノ制ヲ正シ、祭儀ヲ
復シ、廢官數百員ヲ復シ、殊ニ和歌ニ妙ナリ、其神儒佛ノ
御製天下ニナ感誦ス、神ノ歌ニ曰、八重雲ヲ拂フ科戸ノ
秋風ニ、高天ノ原ノ月ソサヤケキ、儒ノ歌ニ曰、色ノ濃キ
唐紅ニ染テコソ、大和錦ノ最モハエアレ、佛ノ歌ニ曰、世

ノ中ニカキノ連ノ花ノミリ、有リテ空シキ教ナリケル、
天皇諸皇子皇女ヲ勗ルニ皆讀書ヲ以テス、故ニ東宮博
覽經史ニ涉リ、皇女モ亦然リ、

○仁孝天皇 諱ハ惠仁

光格天皇第四ノ皇子ナリ、母ハ東京極院藤原氏、○三月、
天皇踐祚ス、關白忠良故ノ如シ、九月即位ノ禮ヲ行フ、年
十八、將軍讚岐守松平頼儀等ヲ遣テ、即位ヲ賀ス、○文政
元年、村瀬之熙波ス、之熙栲亭ト号ス、京師ノ人、秋田ノ文
學タリ、博洽ニメ文ヲ善クス、盛名皆川淇園ニ次ク、頼山
陽嘗テ曰、淇園ノ書ハ奔逸、故ニ人之ヲ稱ス、栲亭ノ書ハ

善ク東塚ヲ學テ謹嚴、故ニ著ハレズ、文章ノ優劣ニ至テ
ハ、栲亭ノ文、淇園ニ駕ノ上ルヲ幾等、○五年二月、詔メ大
將軍ヲ以テ左大臣ト為シ、世子家慶ヲ内大臣ト為ス、大
將軍ノ夫人島津氏ヲ從二位ニ叙シ、世子ノ夫人鷹司氏
ヲ從三位ニ叙ス、大猷以來、左大臣ニ任スル者ナシ、在職
ノ久キヲ以テ之ヲ進ム、世子ノ大臣ニ任スル者、鎌倉以
來ノ無キ所ナリ、○六月、清人徐稼圃長崎ニ來リ、村瀬之
熙カ藝苑日鈔、太田元貞カ九經談、多紀元簡カ醫牘ヲ求
ム、稼圃墨梅ニ巧ナリ、元貞錦城ト号シ、經學ヲ以テ著ハ
ル、元簡桂山ト号シ、該博ニノ醫ヲ善クス、○八月、相馬大

作、關良助、津輕越中守寧親ヲ怒マシテ、出羽ノ白沢驛ニ於テ之ヲ銃センコトヲ謀ル、事露ハレ、幕府捕ヘテ之ヲ誅ス、○七年九月、上皇修學院ニ幸シ、紅葉ヲ觀ル、群臣ニ命メ、詩歌ヲ賦セシム、將軍其儀仗ノ美ナルヲ聞キ、京師ノ画人ニ命シ、之ヲ圖セシメテ拝覽ス、行幸ハ將軍ノ奏請スル所ナリ、○九年、大舍人源松苗國史略ヲ修メテ成ル、○十年三月、詔メ、將軍家齊ヲ以テ太政大臣ト為ス、其四十年職ニ在テ、勤勞スルヲ賞スルナリ、將軍固辭スレ、命ヲ得ス、世子家慶ヲ從一位ニ叙ス、○十二年、三月廿一日、江戸大ニ災ス、彦邸街會延焼スル者十一萬八千、焚

死スル者千九百余人、○天保二年、幕府安治川ヲ濬ス、大坂ノ庶民争テ役ヲ奉シ、其土ヲ集テ一阜ヲ海口ニ造リ、天保山ト名ツク、○水戸藩ノ史臣青山延子皇朝史略ヲ著ハメ成ル、川口長孺征韓偉略ヲ著ハス、○三年九月、賴襄歿ス、襄字ハ子成、山陽ト号ス、春水ノ子ナリ、學殖文章、當世ニ冠タリ、古賀敷堂其文才ヲ稱メ、天下第一ト為ス、少將樂翁嘗テ其著ハス所ノ日本外史ヲ請テ之ヲ觀、大ニ其史筆ヲ賞ス、山陽汝メ未タ數年ナラス、外史政記等ノ書、盛シニ世ニ行ハレ、世道人心ニ功アル甚ク大ナリ、○六年十二月、幕府仙石道之助久利カ封ヲ削リ、其老仙

石左京等ヲ誅ス、初メ左京庶子ニメ且慧ナルヲ以テ播磨守久道ニ罷用セラレ、已ニメ久道ノ子讚岐守政美率以幼子久利嗣テ立ツ、左京稍ク驕恣、其幼主ヲ蔑メ、獨リ國事ヲ專ニシ、遂ニ已レカ子小太郎ヲ以テ、久利ニ代シト欲ス、岩田靜馬、宇野甚助等狡奸ヲ以テ左京ニ阿附シ、密カニ謀テ醫已伯ニ命シ、毒ヲ館ニ置テ久道ヲ殺シ、已レニ異ナル者ハ、皆誣構メ之ヲ罪ス、獨リ河野瀨兵衛、及ヒ江戸ノ邸吏神谷轉之ニ附カス、且密謀ヲ知ル、因テ瀨兵衛ヲ讒構メ之ヲ斬リ、國事ニ託メ轉ヲ江戸ヨリ召ス、轉其意ヲ悟リ、禍ニ及ントヲ恐レ、邸ヲ脱メ普化寺ニ入

リ、名ヲ交鷲ト改ム、左京潛カニ入テ遣テ之ヲ捕ヘシム獲ス、大ニ懼レ、遂ニ江戸ノ町奉行、筒井伊賀守ニ請テ、之ヲ捕フ、轉其廳ニ至テ寬ヲ訴ヘ、且左京等カ逆状ヲ陳ス、具サニ證左アリ、因テ之ヲ寺社奉行ノ廳ニ送ル、時ニ中務太輔、脇坂安董奉行タリ、明斷ヲ以テ稱セラル、乃チ轉ヲ名テ状ヲ訊ヒ、尽ク其情ヲ得タリ、速カニ左京等十餘人ヲ江戸ニ檻送シ、之ヲ鞠訊メ、皆罪ニ伏ス、乃チ左京ヲ梟シ、靜馬甚助ヲ斬リ、毒ヲ置クノ醫ヲ出石ニ磔シ、其餘ハ流放ニ處ス、濱田彦松、平周、防守、康任、左京カ姻戚タリ、坐メ老中ヲ免ス、松平主税、曾我、豊後守等、亦罪ヲ獲タリ、

○七年三月ヨリ十月ニ至ルマテ天下淫雨多ク六月冷寒綿衣ヲ著ク天下大ニ飢ニ餓草路ニ滿リ幕府京師及ヒ江戸ノ飢民ヲ賑ス諸國ノ豪民亦倉ヲ開テ賑救スル者甚ク多シ天皇奉幣使ヲ伊勢ニ遣テ年ヲ大朝ニ祈ル○八年二月十九日大坂町奉行ノ屬吏大塩平八郎其子格之助等乱ヲ作ス初メ平八郎米價踊貴メ窮民ノ益々困スルヲ患ヒ自ラ書籍什器ヲ鬻テ窮民ヲ賑恤シ數々奉行ニ説テ大ニ賑救センコトヲ請フ奉行等應セス平八郎憤慨ニ堪ヘス同僚瀨田濟之助庄司儀左衛門近藤梶五郎渡邊良右衛門等十餘人ト密カニ謀テ黨ヲ集メ檄

ヲ作テ攝河泉ノ飢民ヲ煽動シ此日拂曉銃ヲ發シ火ヲ縱チ天満市民ノ宅ヲ燒キ旗幟ヲ建テ救民ト稱シ其黨凡五百人進テ奉行ノ廳ニ逼ル期ニ先タツト一日其黨奉行ノ宅ニ至テ自首スル者アリ城代大炊頭土井利位急ニ近國ノ諸侯ニ檄メ援兵ヲ出サシメ町奉行跡部山城守良弼堀伊賀守利堅ト俄カニ守備ヲ修メ天満天神ノ二橋ヲ撤メ之ヲ待リ賊至テ渡ルコトヲ得ス乃チ轉メ難波橋ヲ渡リ隊ヲ分ツテ二ト為シ火箭ヲ發メ火ヲ放ツト益々急ナリ烟焰空ニ漲リ市民驚走ス尼崎郡山岸和田等ノ諸藩皆變ヲ聞テ兵ヲ出ス二十日玉造ノ戌遠

藤但馬守胤統ノ部屬山崎彌四郎坂本鉦之助本多為助
等三十餘人各銃ヲ携ヘ跡部良弼ノ隊ト共ニ賊ヲ蹤メ
進ミ一隊ヲ平野街ニ破リ又一隊ニ淡路街ニ逢テ相距
ル一町鉦之助進テ賊ノ隊長梅田某ヲ銃メ之ヲ斃シ
賊ノ發スル所ノ凡其陣笠ニ中ル賊皆驚キ散メ迹無シ
大坂ノ街會延焼スル者一萬八千二百餘戶廿一日火熄
ム既ニメ賊ノ渠帥或ハ擒ニ就キ或ハ自殺ス三月廿七
日人アリ城代ニ告テ曰平八郎父子油掛町五郎兵衛カ
宅ニ匿ルト乃チ吏率ヲ遣テ之ヲ圍ム父子火ヲ放テ自
殺ス明年黨與數人ヲ誅シ餘黨悉ク平ラク坂本鉦之助

ヲ賞メ白金及ヒ平八郎カ用ル所ノ大銃ヲ賜ヒ其餘賞
賜差アリ初メ平八郎學ヲ好テ聲望アリ玉陽明ノ説ヲ
信シ自ラ視ル一甚タ高ク諸奉行皆其倔強ニ御シ難
キヲ苦シム獨リ矢部駿河守ノ奉行タル鉦之助ヲ控御
シ平八郎モ亦其材用ヲ屢フト云○四月大將軍職ヲ辞
シ世子内大臣家慶職ヲ嗣久○八月詔メ内大臣家慶ヲ
以テ征夷大將軍ト為ス○九年三月江戸ノ西城災アリ
諸侯ニ課メ又之ヲ築ク明年四月成ル○十一年十一月
先是天皇朝覲ヲ欲シ費用ヲ幕府ニ徵ス幕府金一萬兩
ヲ獻ス是月朝覲ノ禮ヲ行ハントス上皇崩スルニ遇テ

果サス、朝野之ヲ惜ム、○十二年閏正月、前大將軍家齊薨
ス、年六十九、文恭ト諡ス、○是月廿七日、公卿三人ヲ泉涌
寺ニ遣テ、光格天皇ノ諡号ヲ上皇ニ奉ス、宇多天皇諡法
ヲ停メテヨリ、此典廢スル者、六十代ナリ、是ニ至テ之ヲ
復ス、○十二年十月、幕府天下ニ令メ奢靡ノ器什、及衣帶
笄簪ヲ用ルルヲ禁ス、劇場ヲ淺草聖天町ニ移シ、俳優ノ
徒出行スルニ必ス葦笠ヲ被ラシム、○十三年、幕府諸商
ノ社ヲ結フヲ禁シ、又米油薪炭塩醬餅菓、販賣ノ法ヲ
定メ、物價ヲ平ラカニス、婚葬飲膳、僕從雜役ノ類皆制
リ、又市上鬻ク所ノ繪画冊子、及ヒ童兒ノ玩器泥塑紙、爲

ニ至ルマテ、五杉ヲ施スルヲ禁ス、時ニ越前守水野忠邦
政ヲ執リ、白川侯ノ政蹟漸ク廢弛スルヲ慨シ、屢々節
儉實素ノ令ヲ下シ、奢靡豪華ノ俗ヲ以テ、遽カニ之ヲ寬
政ノ舊ニ復セント欲ス、故ニ徃々人ノ耳目ヲ驚カシ、且
其政令煩苛ニメ、下ニ便ナラサル者亦多ク、衆心服セス、
尋テ印幡湖ヲ疏メ、之ヲ裏海ニ通セント欲シ、諸侯ニ課
メ役ヲ助ケレム、役既ニ興ル、衆議益々囂然タリ、○三月、江戸
ノ町奉行、矢部駿河守、罪アリ、伊勢桑名ニ拘セラル、駿河
守桑名ニ在テ、憤慨ニ堪ヘス、遂ニ食ヲ絶ッテ死ス、幕府
其疾篤シト聞テ、醫官某ヲ遣テ之ヲ視セシム、駿河守憔悴

悴骨立某ニ謂テ曰、吾固ヨリ死ヲ決ス、何ソ藥餌ヲ用井
ニ、唯吾二月廿一日ヲ以テ罪ヲ獲タリ、吾カ罪ヲ得ルノ
日ヲ以テ、吾ヲ構陷スル者ニ報セントス、君幸ヒニ之ヲ
記セヨト、幾クモ無メ歿ス、後ヲ弘化二年三月、水野越前
守、鳥居甲斐守、神原主計頭等果ノ其廿一日ヲ以テ罪露
ハレテ廢セラレ、其正月廿一日、矢部鶴松ヲ召メ俸ヲ與
ヘ家ヲ復ス、○八月、幕府朝川鼎（表）崎懐堂ヲ召メ凡ル鼎
字ハ五鼎善庵ト号シ、懐堂ト共ニ經術篤行ヲ以テ、一代
ノ名儒タリ、○十月、先是幕府勘定奉行ノ屬吏、市野茂三
郎等數人ヲ遣テ、諸國ノ田地ヲ打量セシム、既ニ北陸ヲ

丈量シ、是月近江ニ入り三上村ニ館ス、諸村ノ民之ヲ聞
テ、黨ヲ結テ群起シ鐘鼓ヲ撃テ竹槍ヲ携ヘ進テ其館ニ
逼ル、凡ソ一萬餘人、沸聲雷ヲ成ス、茂三郎驚テ遠藤氏ノ
縣廳ニ逃ル、諸吏ハ走テ三上山ニ入ル、群民山ヲ焚ント
欲シ、或ハ旅館ニ入テ帳簿ヲ乱棄シ、箱櫃ヲ打壞ス、遠藤
氏ノ吏出テ、之ヲ諭ス、群民打量ヲ停メン、門ヲ乞ヒ、且
再ヒ此郡ニ入ラサルノ證書ヲ請フ、茂三郎己ムヲ得
スメ其書ヲ與フ、衆乃チ退キ去ル、後チ幕府其魁ヲ捕ヘ
テ之ヲ誅ス、然レ打量ノ事終ニ止ム、○十四年四月、將軍
家慶日光廟ニ詣ル、○五月十八日、將軍水戸中納言齊昭

ノ名テ其國ニ就テヨリ、封内化ニ嚮ヒ、政治徳教ノ美義
 公ノ遺志ヲ繼クテ賞シ賜フニ黄金百枚馬鞍ヲ以テ
 シ、將軍手ツカラ包清ノ寶刀ヲ賜フ、蓋シ齊昭封ヲ嗣テ
 ヲリ、弊政ヲ革メ奢侈ヲ禁シ、節儉ヲ勤メ國內大ニ化ス
 幕府ノ改政ニ先タツテ十餘年、時人或ハ曰、幕府ノ政治
 水戸ニ働フナリト、○六月、幕府命メ下総ノ印旛湖ヲ疏
 鑿シ、水路ヲ品川ノ海ニ通セントス、松平因幡守、酒井左
 衛門尉、黒田甲斐守、水野出羽守、林播磨守等ニ命メ其役
 ヲ助ケシム、閏九月ニ至テ、遂ニ其役ヲ罷ム、○七月、幕府
 大坂ノ巨商ニ課メ金ヲ納メシム、國用足ラサルヲ以テ

ナリ息ヲ加ヘ廿年ヲ以テ之ヲ償ハント、○十一月、江戸
 ノ画入谷文晁没ス、初メ画ヲ加藤文麗ニ學ヒ、後チ元人
 ニ法ツテ一家ヲ成ス、近世ノ巨擘ナリ、文麗伊賀守ニ任
 ス幕府ノ世臣也、○弘化元年五月、幕府水戸中納言齊昭ヲ
 退隱セシメ、之ヲ駒込邸ニ幽ス、先是中納言大ニ國政ヲ
 修メ、藤田虎之助、戸田銀次郎、武田彦九郎等ヲ擢用メ國
 政ニ參與シ、弘道館ヲ起シ文武ヲ振興シ、奢ヲ抑ヘ儉ヲ
 尚ヒ、郡吏村正ニ至ルマテ、彬々化ニ嚮フ、尤モ心ヲ海防
 ニ留メ、其史臣會澤恒蔵カ著ハス所ノ新論ヲ採リ、大砲
 ヲ鑄礮臺ヲ築キ、春秋追鳥狩ヲ為メ兵馬ヲ操練ス、兵士

數萬人甲冑ヲ着ケ旌旗ヲ列ス升平日久シク人始テ軍
装ヲ目ニス期ニ至テ四方来リ觀ル者雲ノ如ク其金鼓
節制ノ嚴銃礮轟發ノ快ヲ見テ皆嘆美セサルヲ無ク天
下嘖々トノ之ヲ稱ス是ニ至テ幕府其異志アルカト疑
ヒ俄カニ之ヲ江戸ニ召シ責ルニ驕慢日ニ長シ恣ニ制
度ヲ改ルノ事ヲ以テメ之ヲ駒込邸ニ幽ス藤田以下國
事ニ關スル者皆幽セラレ舉藩愕然人心大ニ動ク或ハ
云奸人アリ之ヲ讒構スト○此月十日江戸大城災アリ
幕府舊ニ依テ金ヲ諸侯ニ課ス幕局ノ僧井上因碩上書
メ曰方今天下節儉ノ名有テ富强ノ實無ク列侯ノ疲弊

極レリ假令ヒ命ヲ奉ノ資ヲ獻スルモ其封内農商ノ金
ヲ拵スルニ過サルノミ天下ノ膏血ヲ以テ修築ノ用ニ
供ス恐クハ盛徳ノ事ニ非ス宜ク大坂ノ豪商ニ課スル
所ト府下市民ノ獻スル所ヲ以テ假ニ之ヲ築キ一切諸
侯ノ課金ヲ停ムヘシ示スニ茅茨土階ノ儉ヲ以テスル
片ハ必ズ庶民ノ子来ノ時アラント諸執政之ヲ嘉納シ遂
ニ課金ヲ減ス因碩學ヲ好キ唯ク圍碁ニ妙ナルノミナ
ラス同時林元美亦タ然リ○六月和蘭ノ使者戰艦一隻
ヲ以テ長崎ニ来リ國書ヲ幕府ニ呈メ曰西洋同盟ノ諸
國我カ邦ヲ覬覦ス或ハ来リ犯スヲ有ント○二年二月

廿一日、水野越前守、堀大和守罪アリ、老中ノ免ノ屏居ス、
市民數百人、夜ル水野ノ邸ニ至テ瓦礫ヲ抛ツ、雨ノ如
ク、近傍ノ邸、皆吏卒ヲ出ノ之ヲ制ス、後テ其封ニ萬石ヲ
削リ出羽ノ山形ニ遷ス、大和守ノ封一萬石ヲ削ル、又鳥
居甲斐守、神原主計頭罪アリ、甲斐ヲ籍没シ、相良壹岐守
ノ邸ニ拘入、神原モ亦籍没セラル、其餘連坐メ罰セラル
者數十人、○十二月、先是將軍家齊奏メ、諸僧紳ノ為ニ
學舎ヲ建春門ノ前ニ建ツ、是ニ至テ成ル、天皇之ヲ嘉メ、
名ヲ學習院ト賜入、家齊十三經及ヒ歴史ノ諸書ヲ納ル、
○三年正月廿六日、天皇崩ス、壽四十七、天皇孝順ニノ學

ヲ好ミ、尤モ和歌ニ巧ナリ、光格帝ノ疾アル、天皇女興ニ
御以替カニ宮ヲ出テ、朝覲ス、

○孝明天皇 諱ハ統仁

仁孝天皇第四ノ皇子ナリ、母ハ新待賢門院藤原氏、○正
月天皇踐祚ス、年十六、左大臣政通關白タリ、明年九月、即
位ノ禮ヲ行ス、將軍少將出羽守松平齊貴等ヲ遣リ、世子
右大將家定、大膳大夫武田信典ヲ遣テ即位ヲ賀ス、○八
月初、長崎ノ人本庄茂平次ナル者、高島四郎太夫ノ事
ニ關係シ、罪ヲ獲テ、江戸ニ來リ、名ヲ辰輔ト改メ、鳥居甲
斐守ノ臣トナリ、長崎ノ吏人私曲ノ状ヲ陳ス、鳥居時ニ

目付タリ、大ニ之ヲ親任ス、所奉行タルニ及テ、老中水野
忠邦ニ親近センコトヲ欲シ、之ヲ辰輔ニ謀ル、辰輔元ヨリ
奸ニメ黙智アリ、密カニ謂テ曰、武州大井村ノ修驗了善、
祈禳ヲ善スルヲ以テ著ハル、僕潜カニ往テ其弟子トナ
リ、利ヲ啗ハシメテ非常ノ祈禳ヲ行ハシ、君因テ了善ト
僕トヲ捕ヘヨ、鞫問ニ臨テ僕之ヲ證セン、君乃チ祈禳ノ
秘迹ヲ以テ密カニ之ヲ水野氏ニ陳スルキハ、水野氏必
ス其發擿ノ功ヲ賞セント、鳥居喜ンテ其計ニ從テ、忠邦
果メ之ヲ親近シ、大ニ任用セラレ、辰輔曾テ詭秘ノ計ヲ
以テ、其所親井上傳兵衛從士ニ問フ、井上劔法ヲ善クシ、

人ト為リ剛直之ヲ聞テ、大ニ辰輔ヲ規諫ス、辰輔其計ノ
淺レンコトヲ恐レ、遂ニ井上ヲ下谷御成卷ニ暗殺ス、時ニ
天保九年二月ナリ、井上ノ弟、熊倉傳之丞、松平隱岐守ノ
臣タリ、之ヲ聞キ其仇ヲ復セント欲メ、仕籍ヲ脱ス、其子
傳十郎亦タ父ヲ援ケント欲メ之ニ從テ、然レ未タ仇人
ノ誰タルヲ審カニセス、己ニメ傳之丞心ヲ竭メ探偵シ、
終ニ辰輔カ所為ナルコトヲ確知ス、辰輔之ヲ悟リ、亦傳之
丞ヲ誘殺ス、先是、十津川ノ人小松典勝、劔法ヲ井上ニ學
ブ、亦タ師ノ仇ヲ報セントメ、江戸ニ来リ、カヲ傳十郎ニ
協セ、共ニ辰輔ヲ蹤跡ス、辰輔既ニ傳之丞ヲ殺シ、鳥居ヲ

孝明

辭ノ潜カニ長崎ニ往キ其舊識ノ家ニ潜匿ス故ヲ以テ
二人其所在ヲ知ラサル者數年島居罪ヲ蒙リ廢錮セラ
ルニ及テ幕府辰輔ヲ捕ヘテ江戸ノ獄ニ逮ス二人大
ニ喜テ其罪ノ定ルヲ待ツ此月六日辰輔放逐ノ讒ヲ蒙
リ板輿ヲ以テ評定廳ヲ出ツ二人之ヲ一橋門外ニ待テ
輿中ヨリ曳キ出メ呼テ曰父及ヒ伯父ノ仇ヲ報ス曰師
ノ仇ヲ報ス辰輔驚顔土ノ如ク一語ヲ出サズ二人左右
ヨリ之ヲ斬テ其喉ヲ刺ス府下ノ人辰輔ヲ惡ク陰力ニ
復仇ノ舉ヲ助クル者多シト云○十月天皇詔メ經史數
十部ヲ學習院ニ賜フ開白政通モ亦和漢ノ史籍ヲ納ム

○四年三月天皇又學習院ニ經解數部ヲ賜ヒ九日ヲ以
テ開講セシム○此月廿四日悖州地大ニ震ン松代松本
須坂飯田高遠小諸等尤モ甚シ時ニ善光寺ノ開籠ニ屬
シ遠近來リ餐スル者甚々多ク墜死三千餘人幕府松代
以下ノ諸藩ニ金ヲ貸メ之ヲ賑救ス○嘉永二年二月將
軍大ニ小金原ニ獵メ以テ武ヲ講ス老中阿部伊勢守正
弘ヲ中營ニ召メ陣袍ヲ賜フ其指揮宜キヲ得ルヲ賞ス
ルナリ○七月先是外國ノ船松前對馬浦賀下田大島等
ニ至リ或ハ上陸シ或ハ薪水ヲ乞フ者數々幕府瀕海ノ
諸藩ニ令メ益々守備ヲ修メシム是月又五島左衛門尉

○孝明

盛成、松前伊豆守為吉ニ命メ、新々ニ城ヲ海嶺要害ノ地ニ築テ、以テ守備ヲ嚴ニセシム。○秋、幕府諸藩ニ令メ、益々兵士ヲ操練シ、火技ヲ講習シ、緩急變ニ應メ、専ラ實用ニ供セシム。○三年三月、幕府二本松ノ臣、安積祐助ヲ徵メ、儒員ト為ス、祐助良齋ト号シ、學術文章、佐藤一齋ニ繼テ、林門ノ巨擘タリ。○八月八日、江戸大雷、終夜四十餘所ニ震ス、近古未々有ラサル所ナリ。○四年三月十五日、詔メ、和氣清麻呂ニ正一位ヲ贈リ、謚メ、護王大明神ト曰フ、勅使高雄ノ神護寺ノ廟ニ就テ命ヲ宣フ。○十二月、將軍塙次郎前田鐵助ヲ召シ見ル、共ニ國學ニ精キヲ以テナ

リ、次郎ハ保己一ノ男ナリ。○五年五月、江戸西城災ス、明年諸藩ニ課メ之ヲ築ク。○十一月、先是幕府朝鮮ノ聘使ヲ大坂ニ接見セントシ、命ヲ宗對馬守ニ傳ヘテ彼國ニ報セシム、是ニ至テ西城災シ、諸國水旱ノ患アルヲ以テ、其期ヲ延フ、對馬守之ヲ朝鮮ニ告ク。○六年四月、加賀ノ豪商、錢屋五郎兵衛罪アリ、刑セラル、宮腰浦ニ方七里ノ湖アリ、五郎兵衛建議シ之ヲ涸メ、田ト為ント欲ス、近村ノ民、漁網ノ利ヲ失フヲ患ヒ、テ之ヲ拒ム、五郎兵衛密カニ毒ヲ湖中ニ撒セシム、魚ヲ食フ者皆疾シ、村民大ニ困ス、又加賀侯ノ命ト偽リ、奥州ノ山林ヲ購フ、林ニ巨材多ク、

密ニ其利ヲ恣ニス、商肆ヲ秋田弘前ニ置キ、商船ヲ遣テ
外國ト貿易シ、富巨萬ニ至ル、是ニ至テ事露ハレ、其田宅
ヲ籍メ之ヲ磔ス、金澤ノ臣篠原主殿、篠原主膳等十一人
連坐メ自殺ス、○六月三日、米利堅ノ兵艦四艘突然トメ
浦賀ニ来ル、先是来ル者ハ漁船、商船ノミ、兵艦ハ此ヲ始
ト為ス、於是諸鎮相警シ、浦賀奉行、戸田伊豆守氏榮ウヂサダ屬吏
四人ニ命シ哨船ニ乘メ行テ其来意ヲ問ハシム、使節シヤク破
理曰、國命ヲ奉メ特ニ来リ、通商盟約ヲ請フ、國書アリ之
ヲ江戸府ニ呈セン、屬吏等旧例ヲ擧ケテ、長崎ニ於テ接
セント欲ス、使節聽カス、其状頗ル強梁ナリ、奉行書ヲ飛

メ幕府ニ報入、幕府愛ヲ生セン、トテ慮リ、先ツ諸侯伯ニ
命メ、近海及ヒ伊豆相模安房上総ノ衝要ヲ分チ衛ラシ
ム、諸藩ノ兵皆旗旗ヲ建テ礮車ヲ送ル、上下騷然タリ、居
ルヲ五日幕議未タ決ゼス、物議紛興ス、九日終ニ假館ヲ
栗濱ニ設ケ、戸田伊豆守氏榮、井戸對馬守弘道等諸吏ヲ
率テ破理ニ接シテ國書ヲ受ク、破理洋帛洋酒及ヒ諸珍
器ヲ献ス、十一日幕府又二人ヲメ破理ニ言ハシメテ曰、
事ヲ天朝ニ奏シ、衆議ヲ竭メ、而メ復書セント、破理乃チ
明年ノ再批ヲ約シテ退キ去ル、諸藩ノ兵解嚴ス、水戸中
納言齊昭ヲ召テ幕議ニ參セシメ、即日使ヲ馳テ之ヲ京

師ニ奏ス、天皇之ヲ憂ヒ、七朝ノ神官ニ命メ、海内無事ヲ
祈ラシム。○七月、幕府米國ノ書翰ヲ譯メ、侯伯及ヒ麾下
ニ示シ、其利害ヲ陳セシム、或ハ戰ト云ヒ、或ハ和ト云フ、
衆議紛然而メ諸藩文武ノ士材略アル者、争テ其論策ヲ
獻シ、海防ノ書紛然トメ雜出ス、田夫野老ニ至ルマテ、遠
防ヲ口ニセサル者ナシ。○是月、征夷大將軍源家慶薨ス、
贈官前代ノ如ク、慎徳ト謚ス、世子家定職ヲ繼ク。○八月、
魯西亞ノ兵艦長崎ニ來リ、其水師提督布恪廷書ヲ奉行
水野統後守ニ呈メ曰、今ヨリ隣好ヲ修メ、柄太ノ界ヲ正
シ、貨物ヲ貿易セシ、十月、幕府筒井肥前守、川路左衛門尉

儒員古賀増ヲ長崎ニ遣リ、答書ヲ與ヘ、曰、柄太ノ疆界
宜ク圖籍ヲ按ノ、絲毫ヲ誤ル可ラス、五市ニ至テハ祖宗
ノ法アリ、俄ニ改ルテ敢ハス、頃口米國モ亦來リ請ハ、今
若シ之ヲ許スギハ、萬國必ス來リ乞ハン、一ヲ以テ萬ニ
應ス、其カノ給不給、未タ測ル可ラス、凡ソ至重ノ事ハ必
ス之ヲ天朝ニ奏シ、之ヲ諸藩ニ謀ル、我カ國法ナリ、然ラ
ハ則チ三五年ヲ經ルニ非レハ、確定スルテ敢ハス、況ン
ヤ我國貴國ト境界相接ス、尤モ鄭重ヲ加ヘンハアル
可ラス、幸ニ之ヲ領セヨ。○九月、諸侯ニ令メ戰艦ヲ造ラ
シメ、且砲臺ヲ品川海ニ築キ、大礮ヲ鑄、又蒸氣船及ヒ兵

○孝明
三十一

艦ヲ和蘭ニ購フ、先是長崎ノ高嶋四郎太夫ノ禁錮ヲ釋シ、江川太郎左衛門ノ附屬トナス、高嶋泰西ノ銃法ヲ善クシ、門人頗ル多シ、事ヲ以テ禁錮ヲ去ラシ、是ニ至テ其長技ヲ取テ、其罪ヲ宥ルス、或ハ云江川カ幕府ニ請フ所ナリト、○十一月、幕府令メ曰、銃礮ハ西洋ヨリ傳フル所、今其製ヲ模造メ之ヲ用ニ、固ヨリ當今ノ要務ナリ、然レ發放操練ニ至テモ、亦彼カ言語ヲ用ル者アリ、甚タ不可ナリ、今ヨリ、大艦諸器械ニ至ルマテ、彼カ長ヲ取テ、我カ短ヲ補ハントス、宜ク皆國語ヲ以テ譯スヘシ、否ラサレハ徒ラニ新奇ニ馳テ、國體ヲ失ハン、○是月、源家定ヲ以テ

征夷大將軍トナシ、右大臣ニ遷ス、○十二月、水戸中納言齊昭、嘗テ鑄造スル所ノ大礮七十四門ヲ幕府ニ獻ス、將軍之ヲ賞シ、賜フニ鞍馬ヲ以テス、○安政元年、正月十三日、米利堅ノ使節、波理再ヒ兵艦六艘ヲ以テ浦賀ニ來リ、進テ本牧ニ泊シ、去年ノ答書ヲ求ム、幕議未ク決セズ、時ニ使節波理疾アリ、廿七日、其參將阿單須進テ神奈川海ニ泊シ、直チニ江戸ニ至テ之ヲ決セントス、戸田氏榮等、浦賀ヨリ返テ應接シ、國禁ヲ舉テ之ヲ停ム、阿單須抗辯メ、退ク色ナシ、遂ニ假館ヲ橫濱ニ設ク、水戸中納言素ヨリ尊攘ヲ主ト為ス、因テ機ニ乘メ之ヲ拒絕シ、大ニ國威

國史 卷之四
○華朝
三五

ヲ張ン^テヲ議ス、老中阿部正弘等從ハス、越中守細川忠
護^モ、亦精銳ヲ選テ之ヲ擊ン^テヲ請フ許サス、三月、遂ニ
使節ヲ假館ニ延テ之ヲ饗シ、薪水食料ヲ給シ、漂民ヲ撫
恤シ、下田ノ地七里ヲ貸シ、松前箱館ニ米泊スルヲ許ス、
六月、使船皆退キ去ル、尋テ魯西亞和蘭ニ亦之ヲ許ス、
○初メ長州ノ士、吉田寅次郎、兵學ヲ松代ノ儒臣、佐久間
修理ニ受ク、修理象山ト号シ、寅次郎松陰ト号ス、象山每
ニ曰、方今ノ要務ハ海ニ航メ彼カ情状ヲ知ルニ在リ、松
陰元ヨリ志慨アリ、大ニ其説ヲ喜ヒ、去年魯西亞ノ船ニ
乘セント欲メ長崎ニ赴ク、松陰ニ退帆メ志ヲ得ス、是ニ

至テ象山從テ浦賀ノ警衛中ニアリ、松陰其門人澁木松
太郎ト同ク、往テ之ヲ象山ニ謀ル、象山密カニ之ヲ周旋
シ、浦賀ノ小吏吉村一郎ニ託ス、松陰遂ニ松太郎ト共ニ、
夜ル米船ニ入テ附載ヲ請フ、使節許サス、之ヲ送リ返ス、
其國禁ヲ犯スヲ以テ、其藩ニ禁錮シ、象山モ亦幽セラレ、
○四月、大内災アリ、幕府救ヲ奉メ、改造シ、明年成ル、此時
金銀及ヒ絹帛ヲ主上及ヒ准右ニ献シ、又金數千両ヲ災ニ
遭フ播紳ニ分テ給ス、○七月、英吉利ノ軍艦長崎ニ來リ、
書ヲ奉行水野忠篤ニ呈メ曰、我カ國王鄂羅ノ凌暴ヲ惠
ミ、土児其ヲ援ケテ、兵ヲ交ハ、擊テ之ヲ破リ、其敗兵ヲ逐

○詳明
三四

ヲ来ル、今ヨリ近海ニ於テ砲戰シ、或ハ薪水ヲ乞ヒ、器械
ヲ繕フ、コトヲ貴國其レ之ヲ許セト、幕府乃チ長崎箱
館ニ泊スルコトヲ許ス、○九月、魯西亞ノ松、大坂ニ来リ書
ヲ以テ吏ニ附シ、遂ニ南ノ下田ニ至ル、時ニ下田ノ海溢
レ、其船大ニ壞ル、下田ノ吏人善ク之ヲ遇シ、其破壊ヲ繕
ハシム、魯人喜テ去ル、○二年三月、先是詔メ天下ノ梵鐘
ヲ收メテ大砲ヲ鑄造セシム、是月幕府朝命ヲ天下ノ侯
伯ニ傳フ、已ニメ智恩院宮闕ニ詣テ上書シ、輪王寺宮亦
々幕府ニ上書メ之ヲ諫ム、事遂ニ罷ム、○七月、和蘭幕府
ヨリ託スル所ノ、蒸氣船ヲ以テ来リ納ル、幕府乃チ矢田

堀景藏、勝麟太郎等ヲ長崎ニ遣テ、其運用ヲ學ハシム、○
十月二日夜、關東地大ニ震ヒ、江戸尤モ甚シク、城郭邸宅
悉ク破壊シ、火ヲ出スト、五十餘所、死スル者十萬四千人、
○三年七月、大坂ノ兩川口ニ砲臺四座ヲ築ク、○先是幕
府米魯ノ國ニ、薪水ヲ給シ、土地ヲ貸シ、米泊ヲ許スノミ、
未ク貿易ヲ許サス、是月米利堅ノ人、巴爾理斯國書ヲ持
シ下田ニ来テ曰、本國ヨリ日本ニ滞在メ貿易ノ全權ヲ
執ルコトヲ委任セララル、因テ親ク將軍ニ謁メ、其書ヲ呈セ
ント請フ、尋テ英吉利モ亦長崎ニ来リ、蘭人ニ依テ貿易
ヲ請フ、書辭切迫ナリ、老中阿部正弘以下、大ニ之ヲ憂ヒ

國史學要 卷十四 天明

容カニ議メ謂ラク、既ニ和親ヲ結ヒ、繼クニ通商ヲ以テ、
ス、此禁一タヒ弛ムキハ、其他ノ諸國必ス相踵テ來ラン、
彼ニ許メ此ヲ拒ム、忽チ乱階ヲ生ス、我國航海ノ術未タ
熟セス、防禦ノ備未タ全カラス、之ヲ許セハ國力給シ難
ク、許サレハ大本猶弱シ、實ニ國家ノ安危ニ關ルト、大
小ノ監察、評定ノ諸官、長崎浦賀箱館下田ノ奉行等ニ命
メ、其意見ヲ陳セシム、諸吏書ヲ以テ之ヲ詳論シ、且ツ曰、
米國ノ應接、既ニ其機會ヲ失フ、今千悔スルモ及ハス、○
八月、堀田備中守正篤ヲ以テ老中ト為シ、尋テ外國事務
總裁ヲ命シ、同例ノ首座ト為ス、幕府内外多事ナルヲ以

テ、阿部正弘等之ヲ擧ルナリ、

國史攬要卷之十四

國史攬要

卷之十四

○孝廟

表